

道徳を超えるものとしての悪

越門勝彦

悪の概念は道徳に固有のものであろうか。道徳を一定の規則にもとづいて行為の善悪を評価する営みとして捉え、行為がその規則に従っていれば善、反していれば悪というように規定する限りにおいて、悪は道徳の枠内に収まる。しかし、評価の対象を行為に限定せず、既定の規則を唯一の評価基準とみなさずに悪を考察することは可能であり、現にそうした文脈でも悪は論じられてきた。その場合、悪は道徳の体系をはみ出る事象となり、道徳の限界、道徳とその外部との境界線を指し示すものとして現れる。本発表では、ジャン・ナベール（1881-1960）の哲学を中心として、道徳の限界を示すものとしての悪について論じる。具体的には、悪はどのような点で道徳を超え出るものでありうるのか、またそのような悪はどのような仕方で経験されるのか、という問題を取り上げる。

ナベールの『悪についての試論』は、『単なる理性の限界内の宗教』におけるカントの問題意識を引き継ぐものである。この著作でカントは、道徳的枠組みを超え出る悪を根源悪として提示した。彼によれば、人間は誰でも、道徳的動機よりも自然的傾向性に由来する動機を優先する格率を採用してしまう「悪への性癖」を有する。「邪悪さ」と呼ばれるこの性癖について、それが自己欺瞞を特徴とすることをカントは強調する。動機のあるべき優先順位を倒錯しているにもかかわらず、それが具体的な行動と引き起こされた損害として可視化されることがなければ、他人から非難されることなく、当人すらその倒錯に気づかず、自分は規範からの逸脱と無縁な善人だと思い込むというわけである。このように性癖の次元で捉えられることにより、悪には根源性・普遍性と無自覚性という道徳の枠組みにそぐわない性質が与えられることになる。ナベールは、「不純な原因性」という独自概念を用いて根源性のより緻密な記述を試みる一方で、『倫理のための要綱』で主題化した反省を、個々の意識が悪の無自覚を脱する方途として再提示する。反省は、暗黙裡に想定されていた自己のありようと現実の自己のありよとの断絶の認識であり、『悪についての試論』の文脈では、行為の選択肢そのものを産出する原因性にまで遡ってみることで自分は悪と無縁であるとの思い込みが打ち砕かれることに該当する。ナベールは、悪の本質を自我への執着として、自我からの解放を自我の「脱ぎ捨て」*dépouillement*と規定するのだが、脱ぎ捨てにはまずこうした断絶の認識が不可欠であり、それゆえ反省が脱ぎ捨ての必要条件をなすのである。

脱ぎ捨てはどこかで完了するものではなく、反省は繰り返されなければならない。では反省はいかにして繰り返し行われうるのか。何がそのつどの反省を起動するのか。ナベールは、反省主体に完全なイニシアチブを認めず、実際に生じた災いや悪行に対してあってはならない、正当化できないと否定するその判断が反省のきっかけとなると述べる。そして、悪行をなす悪人と自分はどこが異なるのか、災いの犠牲者に対して自分はどのような態度をとっているのかといった相互主観的問いかけが反省を深めてゆく、という。ところで、現に生じてしまった災いやなされてしまった悪行をあってはならないと否定するその判断には、

現実とは別のありようへの志向が内在しているはずである。『悪についての試論』の最終章に登場する「正当化の欲望」がこの志向に対応していると思われる。自我と世界の現実のありように対して同意を拒みつつ、しかしそこに和解をもたらし正当化を実現することへのこの欲望の保持を、ナベールは「メタ道徳的経験」と呼び、宗教的経験との微妙な差異に言及する。悪を悪として成立させるこの正当化の欲望に注目し、そこから道徳の限界、道徳と宗教の境界がどのような形で見えてくるかについても考察する。